

---

# 口だけで

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

口だけで

### 【Nコード】

N3225R

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

言いたいけれど言えない。御互いにどうしても言えない。けれど勇気を振り絞って。こんなお話です。

## 第一章

口だけで

中々言えない。本音はだ。

それで困っていた。しかも一方だけではない。

お互いがだ。困っていた。

「参った」

「言いたいのに」

それぞれ言っ。

「ここで言わないとな」

「どうしようもないのに」

「どうして言えないんだ？」

「言いたいのに」

こう話してだった。どうしようもなかった。言いたくても言えない、どちらでもある。言わなければいけない、しかしそれでもなのだった。

男はだ。女に言いたかった。

女もだ。男に言いたかった。

「ええと、ここで言ったら」

「あの人が」

頭の中ではわかっていて。

「よくなるけれど」

「どうなんだろう」

「言わないと」

「それでも」

あたふたとなっていた。迷っていた。これもお互いである。

「言っのはどうかな」

「まずいんじゃないかしら」

「恥をかくのは向こうだし」

「それを考えたら」

同じ考えになっていたのであった。

その同じ考えのままだ。またお互いを見た。そうして再び見るとであった。また言わなければいけないのではないかとふつふつと思っただった。

それでだ。お互い言おうとした。しかしであった。

「やっぱりなあ」

「ちよつとね」

迷いを見せるのであった。それぞれの中だけに。

「気分を悪くしたら」

「それで怒られたりしたら」

「まずいからな」

「ちよつとね」

こつ言つてまたしても互いを見る。

それでも動けない。いい加減まだるっこしくなってきた。

それでタイミングを見計らうものが出て来た。しかしそれでもだ。

言えない、二人共だ。どうしても。

苦しくもなってきた。言えないからだ。それで辛さを感じてきた。

男が先に言いそうになった。

「やっぱり……」

だが足が自然に止まってしまった。前に出そうになっても出ないのだ。とにかく言えない、しかも動けなくなってきた。

女もだった。同じだった。

「どうしよう……」

表情に出た。困った顔になる。

言えずに困つてだ。途方に暮れだした。

それでも言わねばならない、このことが強迫観念になってきた。

## 第二章

それでだ。男が遂に言ったのだった。

「あの」

「はい？」

「あのですね」

一呼吸置いてだった。そしてであった。

「お口ですが」

「お口にですか」

「青海苔が付いてます」

言ったのはこのことだった。

「それが」

「あつ、そうなんですか」

「はい」

こう女に対して告げた。見れば女は中年の所謂おばちゃんである。でっぷりと太ってパーマにした。何処にでもいるおばちゃんだ。

そのおばちゃんもだ男に言った。

男は男で禿げて痩せた男である。所謂おっさんだ。よれよれになったスーツがどうにも年季や寂しさを醸し出してしまっていた。

そのおばちゃんがだ。おっさんに言った。

「そちらも」

「私もですか」

「お口にマヨネーズが」

それが付いているというのだ。

「それが」

「むっ、そうですか」

「はい、取られた方がいいですよ」

「むっ、これは失敬」

まずはおっさんが口元をハンカチで拭いた。そうしてだ。

おばちゃんもだ。ティッシュで歯を拭いてだ。それで青海苔を取った。

そのうえで二人はそれぞれ言うのであった。

「お好み焼きを食べたんですが」

「さっきたこ焼きを」

「いや、それでなんですか」

「そうだったんですか」

二人は笑って話した。これまでの深刻な面持ちは消えていた。

「何かなと思ってましたが」

「よくあることですよね」

「ええ、本当に」

「ついついたこ焼きを」

「お昼にお好み焼き定食で」

「さっきおやつに」

それで二人共食べたというのであった。

「これならうどんにすべきだったかな」

「アイスクャンデーでも」

何故か食べ物に責任を転嫁した。そのどれもが大阪の食べ物であった。大衆的である。そこには気取ったものは何もない。

「とはいってもお好み焼きは止められませぬ」

「たこ焼きは癖になりますよね」

「いやいや、それでもこれは」

「恥ずかしい」

二人は苦笑いになっていた。

そしてだ。こう言い合ったのだった。

「けれどこれで終わりですね」

「はい、言って下さって有り難うございます」

「こちらこそ。それでは」

「また」

最後に笑顔で別れた。よくある話であった。だがそこに至るまで

にはだ。どうにもこうにも複雑で微妙な心の動きもあったのだ。誰も気付きはしないが。

口だけで 完

2010・10・4

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3225r/>

---

口だけで

2011年3月7日11時51分発行